

墨形石製品の新例と類例

－鹿島台型砥石の提唱－

小林 清 隆

はじめに

千葉県主に中央部に所在する縄文時代後晩期の遺跡から出土する「墨形石製品」は、これまでほとんど注目される機会がなかった遺物である。単に見過ごされてきたのか、そもそも「墨形石製品」といわれても、どのような石製品なのか、唐突過ぎると思われてもしかたがない状況が続いてきた。

その石製品は、君津市に所在する鹿島台遺跡D区の調査時に、加曽利B3式期の大型住居から出土した資料を速報的に紹介した際に、砥石状の特徴ある石製品につけた名称である(白井・小林 2000)。そして、同じ君津市の三直貝塚¹⁾や千葉市六通貝塚に類例が存在することを指摘した。その後、鹿島台遺跡(栗田ほか 2006)、三直貝塚(吉野 2006)、六通貝塚(西野ほか 2007)、袖ヶ浦市上宮田台遺跡(安井 2010)が報告され、資料の蓄積がみられた。

ただ、砥石の破片に埋没してしまったためなのか、その後は新資料の報告に接していなかった。このような状況が続く中、千葉県教育委員会が発掘を行った君津市芋窪原遺跡での存在が明らかになった。現在整理作業実施中であるが、報告書作成に向けての一助になればと思い、紹介を行うこととした。

なお、今回の芋窪原遺跡の資料紹介に当たり、千葉

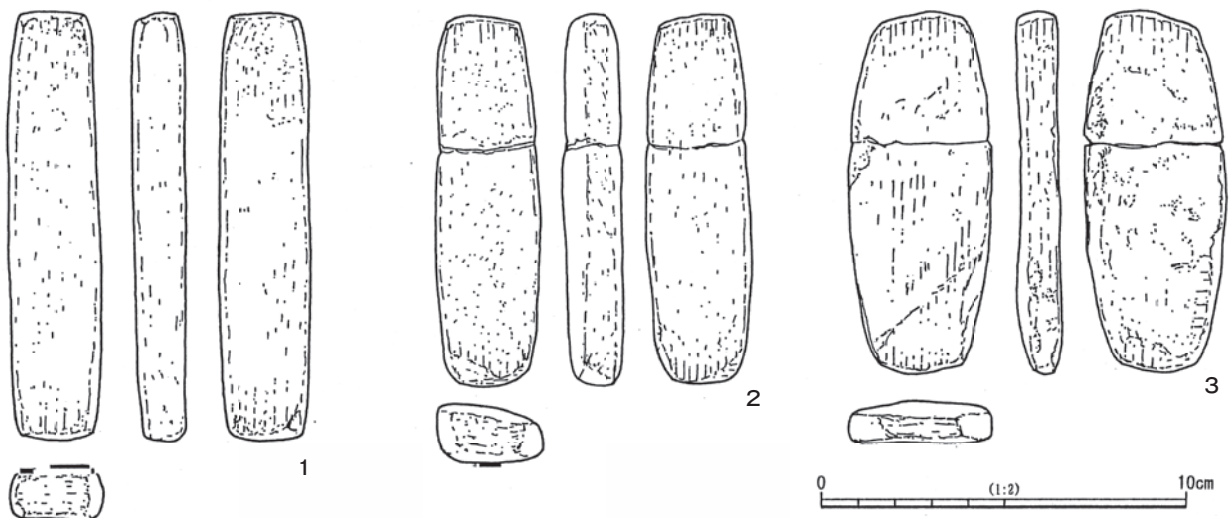
県教育委員会教育振興部文化財課発掘調査班および芋窪原遺跡の整理担当者から、報告者刊行前の資料掲載について快諾をいただいた。

1 墨形石製品の特徴

ここで「墨形石製品」について、最初に注目した鹿島台遺跡D区出土の第1図の資料に基づき、下記に特徴をまとめておこう。

- ① 表裏両面および対向側面が研磨され、形状が書画材料の「墨」に似ている。
- ② 石材は砂岩である
- ③ 火熱を受けている。
- ④ 竪穴住居のピット内からの出土例がある。
- ⑤ 時期は縄文時代後期から晩期の間である。
- ⑥ 用途として、砥石以外の可能性もある。

名称は①の形状からの第一印象を優先したものである。6面に研磨を主体にした調整、あるいは使用痕跡を持つ点を大きな特徴とする石製品である。すでに半世紀以上前から知られていた、鈴木公雄氏の「石包丁様石器」(鈴木 1970)と比較すると、刃部が作出されていない点や、長辺が内湾する型が存在しないなど、明らかに異なる特徴を持っている。石包丁様石器との差異を識別するためにも、新たな名称を用いることが



第1図 鹿島台遺跡出土墨形石製品



第2図 芋窪原遺跡出土墨形石製品

良いと考え、「墨形石製品」と呼ぶことにした。

2 芋窪原遺跡から出土した墨形石製品

芋窪原遺跡は君津市芋窪字芋窪台に所在する遺跡で、小櫃川中流域の標高61m～67mの河岸段丘上に立地している。

発掘調査は、国道410号線の建設に伴い平成30年～令和元年にかけて行われた²⁾。調査では、縄文時代後期の竪穴住居や土坑、後期～晩期の遺物包含層などが発見され、土器、土製品、石器、石製品など多くの遺物が出土した。特に加曽利B 2式～安行2式の土器量は多く、晩期安行式、前浦式の出土も目立っている。

この遺跡から墨形石製品が出土していることが明らかになったのは、水洗作業の途中からである。そして注記が行われ、石器類の分類を実施していく過程で点数が増えていった。第2図が令和3年度末までに確認した遺物である。ただ、これはあくまでも暫定的である。

今回資料を提示するに際しては、便宜的に平面長辺の形状に基づいて、下記のような2類に分類して紹介していこうと思う。

I類

長辺の張りが弱く平行に近いものである。第1図の1・2が該当する。

II類

長辺の張りが明瞭なものである。第1図の3が該当する。

この分類については、どこまでが平行の許容範囲なのか、明瞭な張り出しについても、明確な数値的基準を設けていないため、見た目にはすぎないという曖昧さを残している。

I類(第2図1～5、第3図1～5)

1は本類の中で唯一完形品に近いと認められるものである。表裏面と2側面に擦痕がみられる。被熱は認められない。2は上端部と下端部を欠損している。表裏面は平滑で側面も滑らかであるが、長軸方向の表面に幾分反りが認められる。被熱の可能性が高い。3の側面は調整途中のためか、部分的に凹凸が認められる。また、横断面が緩やかな曲面となる。4の下端部は斜方向に角度が付き、長軸に対して右上がりになるため、中軸で対称にはならない。表裏面は平滑で、特に裏面は滑らかな状態である。また、被熱の可能性が高く、表面は黒灰色、裏面は薄く赤みを呈する。5は中央部分のみが遺存し、上下の大部分を欠いている。現存で幅が4.3cmあることから推測すると、完存していれば、

長さもかなりあったと推測される。表裏面がわずかに曲面を呈し、側面の平滑面幅は厚さの半分以下になる。被熱は顕著ではない。石材は全部砂岩である。

II類(第2図6～16、写真1 6～16)

6は一部後世に受けた欠損部が認められるが、中軸線で左右対称になり、全体に形が整っている。表面は滑らかで、被熱は認められない。7は本来整った形状であったと推察されるが、裏面の半分以上を欠いている。欠損の原因は、被熱によるものと考えられ、全体に赤錆色を呈している。遺存する面は滑らかな状態である。8は欠損しており、しかも遺存部に厚みがあることから、一見磨製石斧の基部のようにみえる。ただ、側面も面を成しており、磨製石斧とはやや異なっている。

9～16についても欠損品である。9は10cm内外の長軸長をもっていたと推測される。幅も3.6cmあるが、厚さは0.7cmと薄い。被熱を受け、特に裏面に赤みを呈する部分を認める。10・14・15は長軸の両面が扁平で、比較的薄い。14・15は裏面が剥がれた状態を呈している。遺存する表面は平滑であるが、6～9などと比較するとザラつきが認められ滑らかではない。

12・13は長軸の面が弱い曲面を呈して平坦にはなっていない。特に13側面の平滑面は狭まっている。2点とも欠損状態で、被熱は認められない。

16は全体に丸みを持ち、長楕円形状を呈する。表裏は平坦かつ平滑で滑らかな状態ある。赤錆状の発色を示す部分が認められることから、被熱の可能性が高い。

完形を保つのは1点のみで、ほかは欠損品である。欠損後に破断面に調整を加えたものは存在せず、欠損が廃棄の契機となったと考えられる。欠損の要因は分からない。石材は砂岩である。

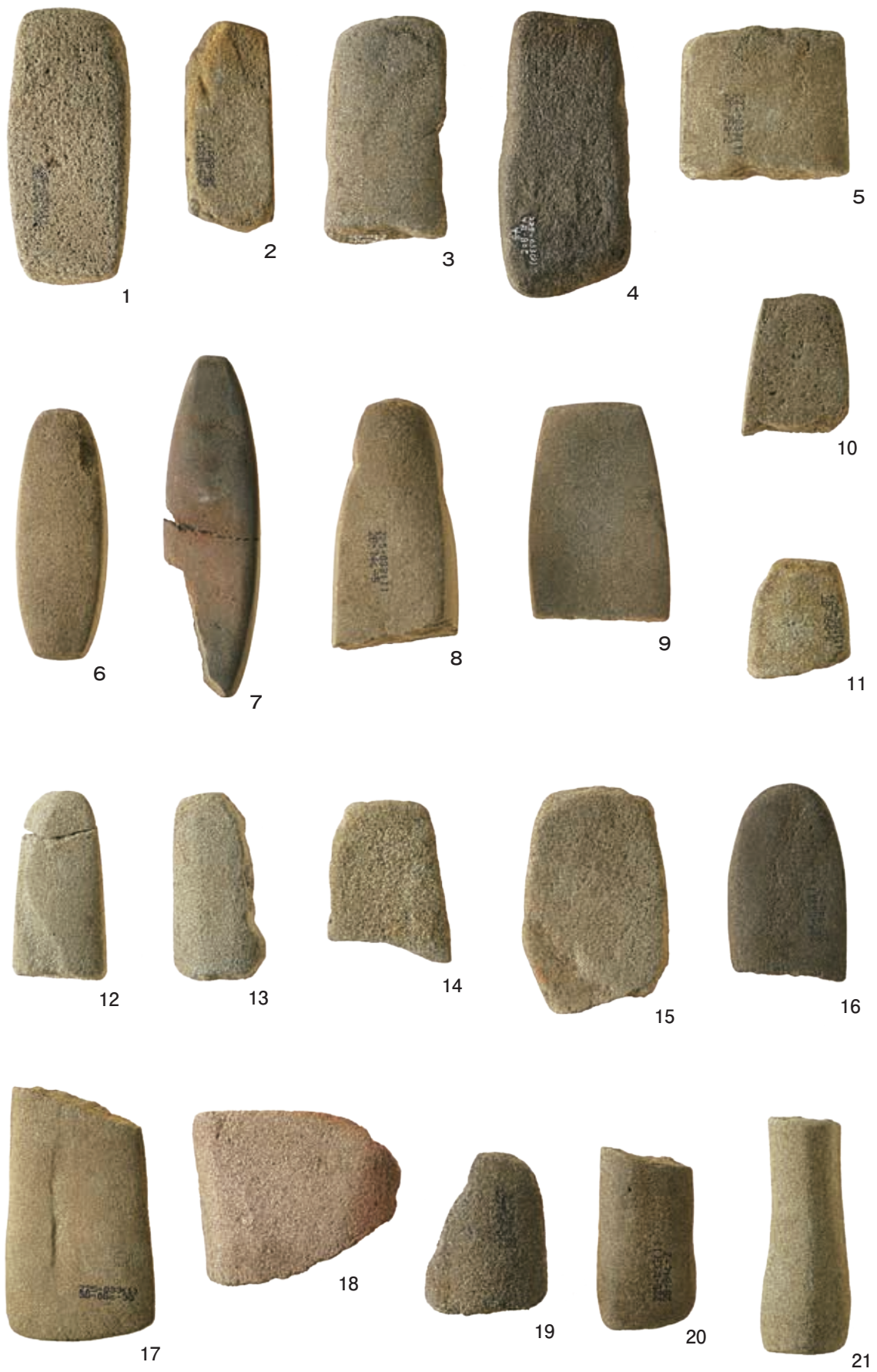
<参考> 石包丁様石器(第3図 17～21)

第3図の写真に掲載した17～21は、芋窪原遺跡から出土した石包丁様石器の一部である。鈴木公雄分類にしたがって分けると、17・18・21は「長辺に存在する二刃が内側にくり込んで内湾する」内湾刃型になる。18は被熱の形跡が明瞭である。21は棒状を呈し、断面形状が楕円形になる部分がみられる。19・20は「長辺に作られる二つの刃がほぼ直線をなして平行する」直刃型である。19は被熱の痕跡が認められる。

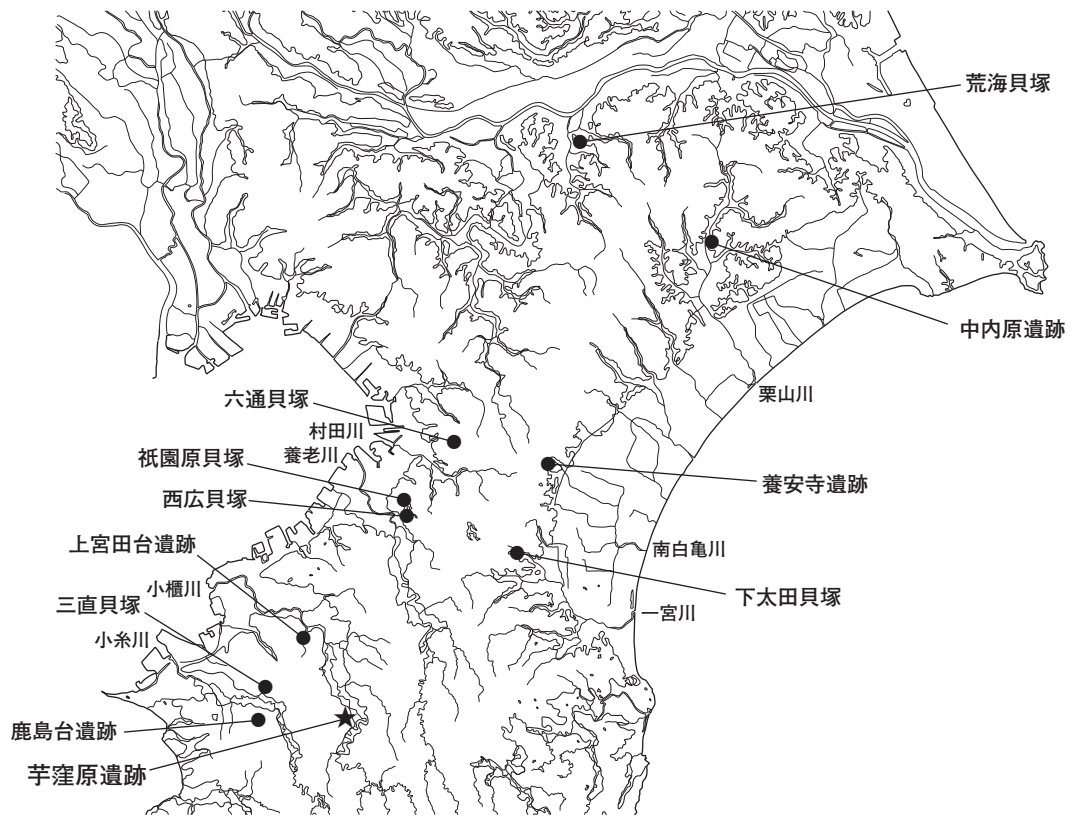
これら5点の石材はすべてが砂岩になり、欠損後に調整を加えた痕跡は認められない。

3 類例について

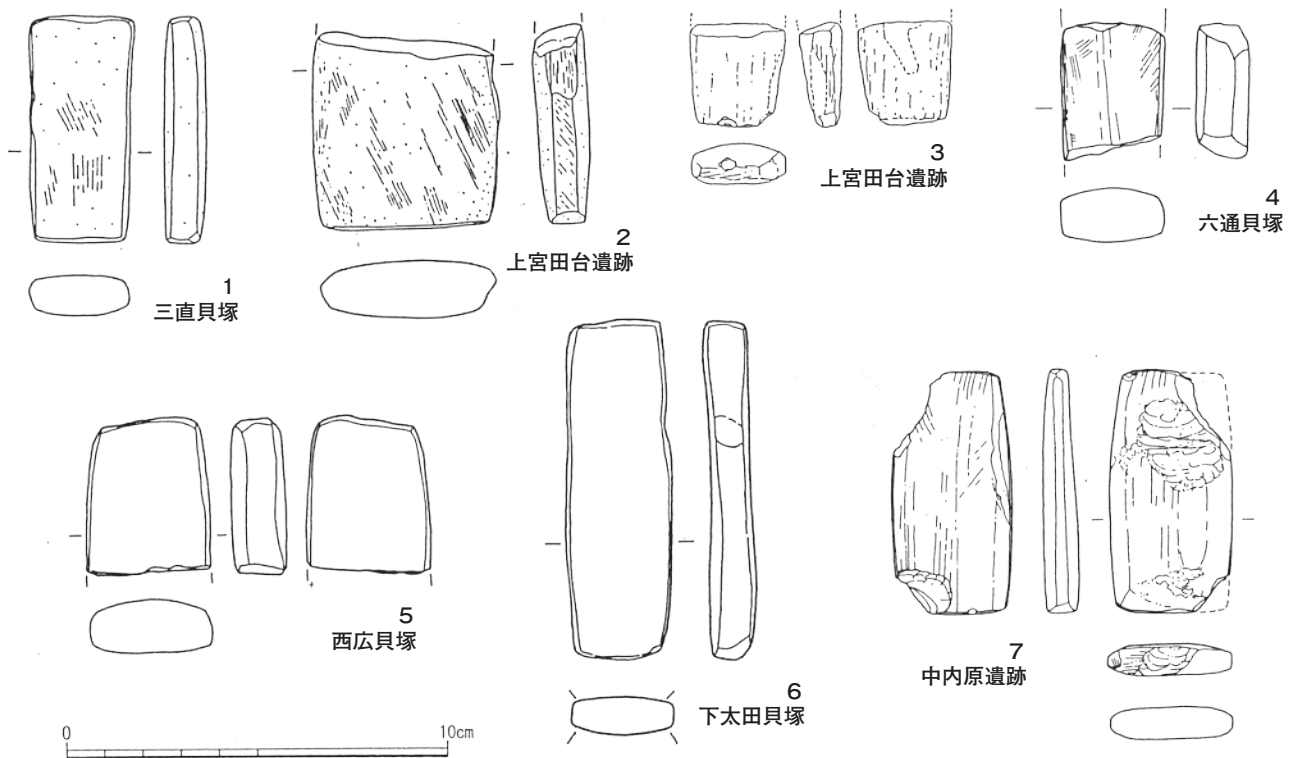
類例は、冒頭に挙げた鹿島台遺跡、三直貝塚、上



第3図 芋窪原遺跡出土墨形石製品・石包丁様石器写真



第4図 出土遺跡分布



第5図 I類の出土例

宮田台遺跡、六通貝塚のほかに、祇園原貝塚（忍澤1999）、西広貝塚（安井ほか 2005）、下太田貝塚（神野ほか 2003）、養安寺遺跡（小林ほか 2017）、荒海貝塚（春成ほか 2021）、中内原遺跡³⁾に存在することを、報告書などで確認した。類例の調査は継続中であり、不十分と承知している。現時点での集成ということになる。

I類（第4図1～5）

完形品に近い状態を保っていたのは、1・6・7の3点である。1は完形品で、1は三直貝塚から出土している。2は上宮田台遺跡から出土している。完形品であったならば、長軸長10cmを超していた大型品であろう。3も上宮田台遺跡から出土した欠損品である。4は六通貝塚から出土した中央部分のみの欠損品である。5は養老川流域に所在する西広貝塚から出土した欠損品である。6は太平洋水系に属する一宮川の支流域に所在する下太田貝塚から出土している。7は太平洋へ注ぎ込む栗山川上流域、多古町に所在する中内原遺跡の表採資料である³⁾。これは欠損部が認められるものの、全容をほぼ知り得る。扁平で被熱は顕著ではない。提示した7点の石材は、すべてが砂岩である。

II類（第6図1～12）

1・2は完形品である。小糸川を挟んで南側の鹿島台遺跡と、対岸に立地する三直貝塚から、ほぼ同形態のものが出土している。3・4は半分が欠損していると考えられる。3はやや厚さを持ち、第2図8と同様に磨製石斧の基部と誤認するかもしれない。4は表面が緩い曲面状を呈する。5は小櫃川流域の上宮田台遺跡から出土している。因みに、この遺跡からさらに南に小櫃川を上ると芋窪原遺跡が所在する。6・7は養老川の下流域に所在する祇園原貝塚からの出土である。6はかなりの大型品であったと推測される。遺存部側面の一部を欠損している。7は中央部分のみであるが、II類と判断した。

8～10は下太田貝塚から出土している。3点を抽出したが、いずれも長さに対して幅が小さく、I類に提示した6と同様に細長い形状になる。この遺跡からは石包丁様石器も出土しており、細身のものが目立っている。遺跡における特徴といえるだろう。

11は太平洋へと注ぐ南白亀川の支流奥部の台地に立地する養安寺遺跡から出土している。完形品と考えられるが、図の黒色部分にガジリを受けている。石材緻密な砂岩で、表裏は大変に滑らかな状態である。中央部にわずかな窪みが認められる。また、窪みの一部に

炭化粒状の黒色の細粒が付着している。

12は荒海貝塚から出土している（春成ほか 2021）。未実見であるため、これも報告書の図と写真から判断した。報告書での所見は、「敲石で長軸の一端を敲き痕を持つが、両面・両側辺ともによく研磨してある。定角式石斧状の整った形をしているので、磨製石斧を転用したのかもしれない。しかし、砂岩製である。」（報告書269頁）と解説している。ただ、一覧表の中での種類は砥石となっている（報告書の表3）。被熱の有無についてはふれられていない。

以上のように現状における類例を挙げてみた。遺跡の分布状況は第4図に示したように、小糸川流域、小櫃川流域、養老川流域に出土遺跡が所在するほか、太平洋水系に属する河川の奥部にも存在が確認された。荒海貝塚出土例が確実であれば、県内で最も北に位置する遺跡ということになる。

まとめ

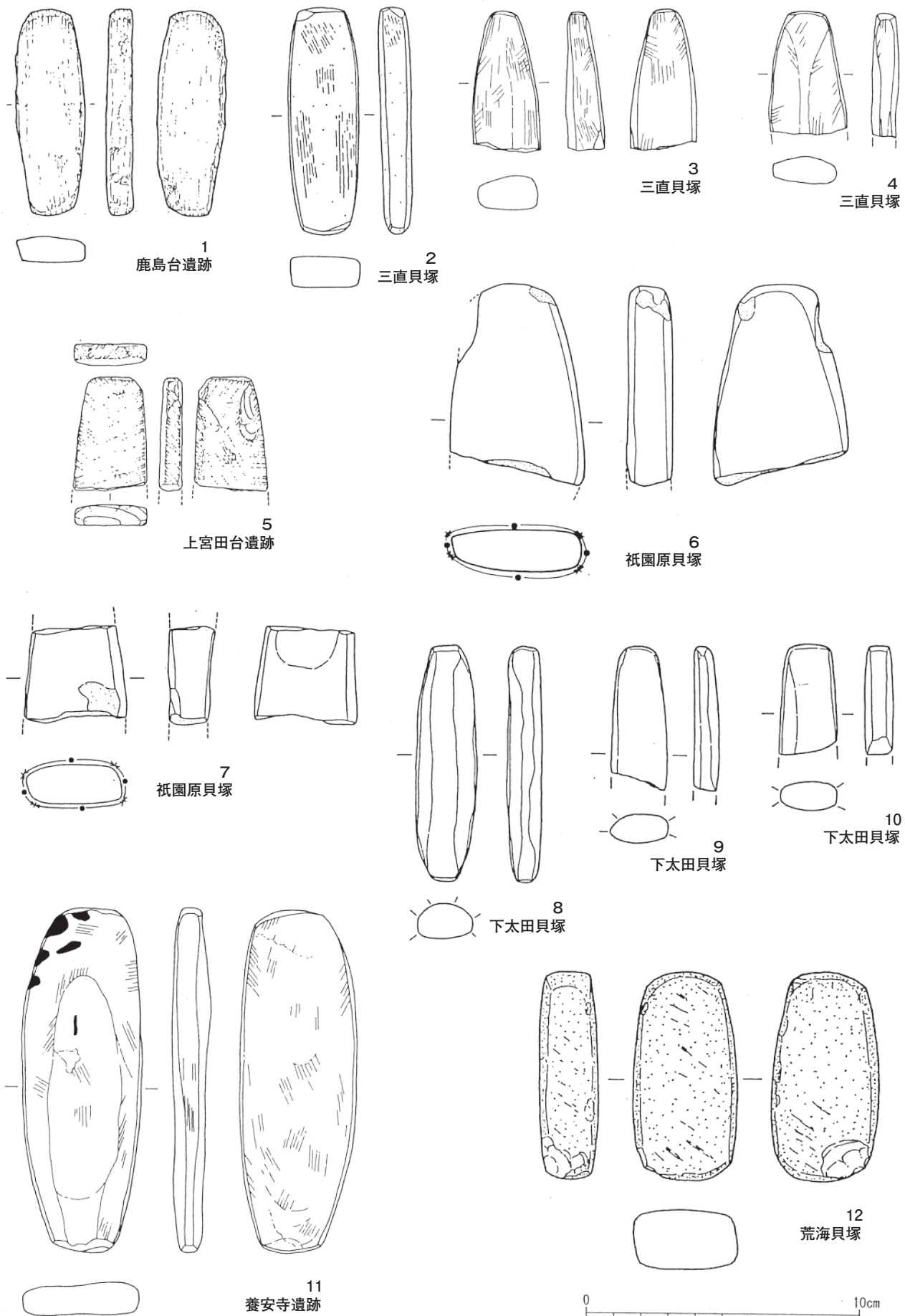
以上、芋窪原遺跡から出土した新資料と類例について属性の一部を提示した。芋窪原遺跡の16点と、ほかの遺跡からの追加事例を加えた上で、気がついた幾つかの点についてふれておこう。

まず、I類とII類の分類を行ったが、I類としたものよりII類が多いという結果となった。I類とII類の分類は基準が曖昧なために恣意的になってしまったが、今のところは両側が内湾するものは存在しない。そしてII類がI類よりも形状にこだわる意識が強く、意図的に左右対称形を作出している。

完形品が少なく欠損品が多くを占めている。これも特徴といえよう。また、欠損後に破断面への研磨は行われず、欠損した時点で使用が終わったものと推測される。

石材はすべてが砂岩である。一般に砥石に分類されているものや、石包丁様石器の石材は砂岩が主体になる。橋本勝雄氏は、縄文時代草創期の「有溝砥石」は、「アルコース質砂岩を主体としており、これに被熱・赤化・破損が付き物」であり、「石材選択と熱処理が、いずれも研磨効果を高めるための工夫にある」と指摘している（橋本 2021）。被熱痕を認めるものがあることは、研磨効果を高めることを目的に、炉の中などで熱したとも考えられる。

出土状況は遺構外からが主体である。鹿島台遺跡における竪穴住居のピット内出土というのは、極めて希少な例であったのだろう。



第6図 II類の出土例

遺構外からの出土が大部分を占めていることから、個々の時期比定が拒まれている。鹿島台遺跡の堅穴住居出土例は加曽利B 3式期に比定され、この時期に伴うとして考えて問題ないと考えている。芋窪原遺跡の包含層は、加曽利B 2式・B 3式が多いので、この時期に伴う可能性が高いといえよう。

類例は後期から晩期の遺跡から出土しており、荒海貝塚例が確実であれば、最も新しい時期の資料になる。いずれにしても、当初に推測していたように、後期に出現して盛行し、晩期まで存在していたようだ。

出土遺跡の分布状況については、主に房総半島の中央部で、東京湾に注ぐ河川流域に立地する遺跡に集中する傾向が認められた。また、太平洋水系に属する遺跡にも散見された。現状では比較的狭小な範囲に分布する石製品である。

今から20年前に「墨形石製品」を取りあげた際には、祭祀具としての機能も視野に入れていた。しかし、現時点では、砥石の特徴を備えているが、祭祀具とする合理的な説明はできない。用途として砥石と考えた方が、より説得力があるといえる。しかし、その研磨対象が何であったのか、そしてどのような使用方法によって6面が形成されるのか、不明な点は依然として克服されてはいない。

鹿島台遺跡の調査時に着目した「墨形石製品」であるが、芋窪原遺跡の出土品と類例を目にして、やはり一定の範型を意識しているという感触が強まった。また、砥石としての用途が有力とみられることから、遺跡名を冠して「鹿島台型砥石」として改めて提唱したいと思う。類例のご教示、ご意見などいただければ幸いである。

今回の資料紹介については、千葉県教育委員会教育振興部文化財課発掘調査班の吉野健一班長、黒沢崇班長はじめ、整理担当者の小澤政彦、鈴木彩菜、武田芳雅、館祐樹の各氏からご協力とご指導をいただきました。また、橋本勝雄氏からは、類例をはじめ多くのご教示をいただきました。既報告資料である三直貝塚、六通貝塚、上宮田台遺跡、養安寺遺跡の実見と実測に際しては、文化財課普及班の蜂屋孝之氏（実見当時）にお世話になりました。皆様にお礼申し上げます。

注

- 1) 鹿島台遺跡の発掘を担当する前に、君津市三直貝塚の発掘を2年間担当しており、そこでも「墨形石製品」が複数出土していたことを確認していた。それを目にしていたので、

鹿島台遺跡発掘時に同形態の石製品が同時期に存在するという見通しが持てた。

- 2) 芋窪原遺跡の発掘概要は下記を参考にした。また、整理作業担当者から成果をうかがった。
○千葉県教育庁教育振興部文化財課 2020『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 平成30年度』
○千葉県教育庁教育振興部文化財課 2021『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 令和元年度』
- 3) 中内原遺跡は、多古町に所在する遺跡で、太平洋へと注ぐ栗山川と、その支流である借当川の分岐点方面である南側に、舌状に張り出した台地上に立地している。本格的な調査は行われていないが、縄文時代中期・後期・晩期～平安時代の包蔵地として周知されている（（財）千葉県文化財センター 1998）。当財団の職員である平野雅一氏は、長年にわたりこの遺跡の踏査を続けており、数多くの土器、石器類、石製品類を表採している。その遺物の1つに墨形石製品が含まれており、平野氏から情報提供と資料公表の承諾を受け、今回実測し掲載することができた。

引用・参考文献

- 忍澤成視 1999『祇園原貝塚』市原市教育委員会
- 神野 信ほか 2003『千葉県茂原市下太田貝塚 かんがい排水事業（排水対策特別型）埋蔵文化財調査業務』（財）総南文化財センター
- 小林清隆ほか 2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32 -東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡』（公財）千葉県教育振興財団
- （財）千葉県文化財センター 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図（2） -香取・海上・匝瑳・山武地区（改訂版）-』
- 白井久美子・小林清隆 2002「縄文時代後期の大型住居と船の線刻をもつ須恵器 -鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介-」『研究連絡誌』第63号（財）千葉県文化財センター
- 鈴木公雄 1970「石包丁様石器について」『史学』第43巻第1号 三田史学会
- 西野雅人ほか 2007『千葉東南部ニュータウン37 -千葉市六通貝塚-』（財）千葉県教育振興財団
- 橋本勝雄 2021「[寒の戻り]と北回りの石器群 -縄文時代草創期後半における本州と北海道の石器群の対比-」『茨城県考古学協会誌』第33号 茨城県考古学協会
- 春成秀爾ほか 2021『千葉県荒海貝塚の発掘調査 国立歴史民俗博物館研究報告第227集』 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
- 安井健一 2010『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10 -袖ヶ浦市上宮田台遺跡2（旧石器・縄文時代）-』（財）千葉県教育振興財団
- 安井健一ほか 2005『市原市西広貝塚Ⅱ』（財）市原市文化財センター
- 吉野健一 2006『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財発掘調査報告書7 -君津市三直貝塚-』（財）千葉県教育振興財団